ぎふの教育

岐阜県教育懇話会
〒509-0108
各務原市須衛町4-291
（株）後藤孵卵場内
℡ 058-370-1510
口座番号 00800-3-5390

綱　領

一、われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
一、われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
一、われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

巻頭言

お正月と日本の神

元岐阜県教育懇話会会長　渡辺　孝

毎年お正月が近づくたびに、子どものころ聞いた「お正月さま、どこまでござった」というわらべうたを思い出す。たぶん今の子どもたちは、こんな歌は知らないだろう。この歌は、柳田民俗学に接するまではお正月を子どもっぽく擬人化したものだと思いこんでいた。しかしどうもそうではないようである。

柳田国男さんによれば、正月には先祖のたましいが帰って来る、それを祝うのが正月の行事だったという。だから正月と盆のあいだには本質的なちがいはない。子どものころに聞いたわらべうたは、年神が近づいて来ることをうたったのもだろうが、その年神が実は祖霊であることは、よほどむかしの子どもたちでも知らなかったかもしれない。『徒然草』の例の「折りふしのうつりかはるこそ」の大晦日の夜のくだりに、「なき人の来る夜とて魂祭るわざはこのごろ都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそ、あはれなりしか」という文章がある。つまり先祖の魂祭りという正月本来のすがたは、すでに兼好の時代でさへ京都ではもう忘れられていたのである。

そういう祖霊のプロトタイプを柳田さんは盆や正月の行事から仏教的ヴェールを取り去ることによって明らかにして見せた。一口にいえば、祖霊はお盆には精霊さまとして、また正月には年神さまという姿で子孫の家々をおとずれるわけである。そしてお盆と正月の行事にはふしぎなほど似通った点が多い。第一に両者とも本来は満月の夜に行われたらしい。だから今は一月一日に行われている正月の行事も、ほんとうは一月十五日のいわゆる小豆正月が中心だったようである。今でもこの十五日正月の前の晩には、大晦日とおなじ行事をする村がある。

第二に、七月七日と一月七日がそれぞれ盆行事のはじまる一つの折り目になっている。七月七日はいわゆるタナバタであるが、これも本来は牽牛織姫伝説とは関係なく、水のべに機（はた）を織って神に仕える乙女がミソギした行事がシナの伝説と結びついたのであろう。一月七日の七草正月とともに、祖霊を迎えるための精進潔斎の行事と考えてよい。

このように春秋二回にわたって子孫の家々をおとずれる祖霊は、それではふだんはどこにいるのだろうか。柳田さんは祖霊は高い山に住むと考える。いわゆる山の神がこれである。そして祖霊が山から下るのは必ずしも盆と正月だけではない。田植えの際、たんぼの真ん中に竹を立てるのは降神のミテグラという意味をもっている。そしてこのように田神になったり山の神になったりしながら、盆と正月に子孫の家々をおとずれる祖霊こそ、日本の神の原型なのだと柳田さんは考える。天孫降臨の神話もミテグラに天降る田の神とは無関係ではないであろう。日本の神は、外国の神にくらべていちじるしくアミリティヴだといわれるが、もしも、『古事記』の神々の原型が祖霊であるとすれば、この素朴な神々さえすでに高度の抽象的思惟の所産だということになる。晩年の柳田さんは『山宮考』でこの考え方をさらに進めて、国家神である伊勢神宮でさえ祖霊信仰から派生したものであることを立証しようとしている。

このような柳田さんの考え方が現在学界でどのように評価されているか知らない。しかしアジアの諸民族が死ねば遠いところへ行ってしまうと考えたのに『魂のゆくえ』で柳田さんがしみじみ述懐するように、われわれの祖先が「故郷の山の高みから子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考え出したことは、限りなくなつかしいこと」だと私は思う。（今回は『ぎふ教育懇話』第35号昭和四十八年十一月一日発行より故渡辺孝元会長の論考を再掲しました。）

特集【令和の御（時）代に思う】

岐阜県教育懇話会の使命

編集部

新しい時代を迎えて、改めて本会の使命は何か、これまでの歩みを振り返りながら考えたい。

本会は昭和三五年一月の「岐阜県教育研究会」の発足に始まる。

当時の社会や教育界は危機的な状況にあった。同年、岸内閣が日米共同防衛を目的とした新たな安全保障条約を締結するが、社会党・共産党を始め、総評・日教組・全学連等が大規模な反対運動を繰り広げており、国会周辺で行われた学生デモで東大生の樺美智子が亡くなっている。

教育界にあっては九〇％を超える教師が加入していた日教組が、文部省と激しく対立し、教員の勤務評定の実施に当たって違法なストライキをうって抵抗した。

日教組は『教師の倫理綱領』に、「日本の社会体制を全く違った観点から再建することが、日教組の歴史的課題であり、闘争することが教師の天職」と規定し、現場では偏向教育が当たり前のように行われていた。

筆者は当時、中学生あったが、社会科教師が天皇を「天ちゃん」、岸首相を「岸というおっちゃん」とさげすんだ話をし、戦前は暗い社会で反体制こそが正義という観念を植え付けられた思い出がある。

このような日教組の教育では、我が国は根底より破壊されるとして、故稲川誠一先生などが立ち上がり、岐阜県教職員組合（岐教組）と同高等学校教職員組合（高教組）に対して日教組より脱退するよう公開質問状の形で要求した。両組合は稲川先生と面談し、日教組の主張を支持しており脱退はしないと拒否の回答をしている。

その間、県内では教育研究会の活動に賛同する人々が、ＰＴＡへと広がり、昭和三七年に「岐阜市教育懇話会」（会長後藤静一（株）後藤孵卵場社長）が組織され、翌年には結成されたばかりの「日本教師会」の研究大会を岐阜市で主管するほどになっている。そして、昭和四〇年に、岐阜県教育研究会や岐阜市教育懇話会が合併し、本会が誕生した。

こうした県民の正常化への理解が後押しとなって教育研究会の教師たちは、岐教組・高教組を脱退した。組織率百％近い教組を出ることは、当然、厳しい批判や圧力がかかる。しかし、稲川先生を始めとする勇気ある教師によって先鞭がつけられると、県下各地で脱退が相次ぎ、その数約八割に達したという。

こうして本会は急速に発展し、昭和四二年九月、活動の柱である機関紙「ぎふ教育懇話」（昭和五六年七月より「ぎふの教育」に改称）を創刊している。その第一号に会の目標が述べてあり、「最大の願いは、世界の平和と文化の進展に役立つ日本人の育成を建設することにある。」としている。そして、「世界の動向を見極めると共に、戦後二十年余の諸問題を深く分析して、総合的に統一ある方向づけをしなければなりません。（中略）その途を率直に掘り下げるために、今回本誌を創刊しました。」と、その意図を紹介している。

また昭和四四年四月には、活動のもう一つの柱「現代国民講座」を開講している。そのねらいは、教育界の現状を鑑み、歴史と時局を中心にして、幅広く諸問題にとりくみ、危機打開の研修をはかろうとするものであった。第一回は皇學館大学教授田中卓博士の「革命と伝統の対決」と題した講演であった。以来、毎月という驚異的なペースで開催（今は年二回）されている。

現在、県内の小中学校では入学式、卒業式で国旗掲揚や国歌斉唱が問題なく実施されている。また本年から小学校で始まった教科としての道徳も不安なく行えるのは、五十年も前に日教組の支配から脱することが出来たからである。

さらに、全国で百％近い組織率であった日教組（※）も、組合員が徐々に減り、今では二十二％程度まで落ちている。組織率の低下は教育団体共通の傾向で、我が国が経済的、政治的に安定してきたことも背景にあると考えられるが、本会のような正常化団体の創設と活動がその流れをつくったのである。

しかし、日教組は依然として我が国最大の教員組織であり、現在も「平和・人権・環境・共生を理念とした民主社会の実現」をかかげて教育界に影響を与えている。従来のような革命志向の言葉こそ消えたが、我が国が長い歴史と伝統に支えられて今日があるという実態を無視し、最終的には人民民主の国を目指していることは明らかである。つまり今なお戦後の「伝統」か「革命」か、という本質的な対立・闘争は続いている。

現に歴史教科書の多くは日本の歴史を現代の価値観で否定的に記述したものが採用されおり、日本の文化・伝統を正しく教えられていない。

これは教科書や教育関係図書を執筆し、教師を指導する学者の多くが、依然として影響力のある日教組の先生方に迎合しているからであろう。

五十年前、冷戦下の日本の安全を

どう守るかで対立し、反戦平和を旗印に革命指向の教育が行われたが、今日、そのトーンは薄れたものの、現在の教育では、将来、日本の平和と安定が保てるか疑問である。領土の一部が占拠され、国民さえ拉致されたままの日本。毎日のように我が領海を侵され、領土さえうかがわれているのに、国会では議員の不祥事ほどの議論もされず、学校では子どもにその危機が教えられていない。

先日、青少年の学力調査で日本の若者は読解力が低下しているという結果が出て話題となったが、他の国際的な意識調査によれば、自己肯定感の低さが極だっており、自国への誇り、自国への貢献に対する関心の低さも明らかになっている。

その意識の方がよほど学力より問題なのではないだろうか。国の将来は青少年の姿を見れば分かるという。国民に自主独立の気概無くして、国の独立はないというのは古今東西の鉄則である。自分自身や自国に自信や誇りをもたず、国に貢献しようという意欲のない状態で国の将来はおぼつかない。

その原因はどこにあるか。日教組は子供の人権を確立していないからだと言う。もっと権利を主張するように指導し、社会の差別をなくすことだと言う。しかし、国の主権も守れない国家や社会が人権を守れるのだろうか。一国平和主義に陥り、周囲の脅威に目をつむることで平和が保たれるとはとても思われない。

我が国のこの状況は戦後政治の結果である。それを主導したのはGHQの占領政策と言ってよい。その問題に早くから気付き、警鐘を鳴らしてきたのが本会であり、日本教師会などの教育正常化団体である。

令和の時代に入り、内外の課題は山積している。それを解決するのは現在の子供達である。その子供達に素晴らしい歴史と伝統のある日本に生まれた幸せを感じさせ、誇りと自信をもって世界に貢献する途を開くことこそが、本会の使命であると考える。（令和元年十二月二十日H記）

※日教組は平成元年、民主系の日教組（日本教職員組合）と共産系の全教（全日本教職員組合）に別れていて、岐教組は全教に所属している。

原点に戻って事に当たる

岐阜県教育懇話会会長　山口三男

平成二三年に会長をお引き受けしてもう九年が過ぎました。

その間、第二次安倍内閣が続き、長かった経済不況も、最近の雇用統計の指標が改善されているなど、他国にくらべて経済的・政治的に安定した状況にあることは、同慶の至りであります。

また本年は東京オリンピックを迎え、いろいろな種目で世界と対等に戦える若者が育っております。きっとラグビーワールドカップ以上に国民は盛り上がることと思います。

しかし、青少年の現状は、依然としていじめや暴力が絶えず、若者が理不尽な殺人事件を起こすなど、私達には理解できないような実態もあります。

専門家はむろん、私達も子供たちの心の育ちのどこに問題があったのかを反省し、健全な育成の在り方を求めていかなければなりません。

本会も会員との交流を図りながら事業を見直していくことが必要と考えております。

昭和三〇年代から四十年代の今より困難な時期に、稲川先生を中心に積極的、精力的に活動を展開された先輩方の姿を思い、「本会の原点」に立ち返って、これからの岐阜県を担ってくれる青少年の育成に力を尽くして行きたいと存じます。

どうぞ会員の皆様の尚一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

（社会福祉法人清心会顧問）

『日本書紀』編纂一三〇〇年　令和時代への期待

後藤章嘉

御代替わりの諸儀は、昨年五月一日の剣璽等承継の儀に始まり、一二月の昭和天皇・大正天皇陵への親閲の儀へと滞りなく行われました。

国民は国書にちなむ元号の令和に好感をもち、大いに使っています。

儀式の中心になる即位礼正殿の儀や大嘗祭は、奈良・平安からの伝統と明治・大正・昭和の実績を生かして盛大に行われました。

一一月一〇日の祝賀御列の儀は、晴天にも恵まれ、一二万人近い人々が沿道に並び歓迎をしました。

私はこの一連の儀式等と国民の反応を見て、日本という国は皇室と国民の深い絆の中で歴史を築きあげてきたという確信を新たにしました。

我が国の天皇は、西欧の王のように他国を征服して君臨したのとは違い、徳と文化の力で地方の豪族を従え、祭り主として民の安寧と国の繁栄を祈る存在でした。

先の大戦の結果、我が国は未曾有の国難に陥りましたが、瞬く間に復興し、経済的には戦前以上の大国となりました。その原因は国民の努力は無論ですが、皇室が存続できたことが大きかったと思います。→次頁へ

前頁より↓昭和天皇様の終戦の詔書を拝した人々は、皆歯を食いしばってでも復興に邁進しようと心に決めたのではないでしょうか。

今日、私どもが平和と繁栄に浴しておれるのは、天皇様を中心にして国民が貧しさや困難に負けず、働いていただけたからであります。

現在、国内外に様々な問題がありますが、滞りなく皇位が継承されたことは何より幸せであったと喜ぶと共に、日本人にはその課題解決に立ち向かい、世界の平和と繁栄に貢献すべき使命があると思います。

令和幕開けの今年は『日本書紀』編纂一三〇〇年にあたります。古典から日本の国柄を学び、そのよさを広めていく年にしたいと思います。

人間関係を支える国語教育と求められる教師

横山　泰

令和の時代も国民的な感動のうちに二年目に入るが、今日の日本は、「絆」という言葉が強調されるほどに人間関係が弱くなっている。

同時に　全ての世代が言語の豊かさを失ってきている。自分の思いを相手に伝え、相手の言わんとするところを十分にくみ取れなければ相互理解ができない。この状態に感情が加わると、関係は深刻な状況になってしまう。

多様化する知的社会を前に、読解力、思考力、問題解決能力の会得が必須という時代なのに、現実は全く反対なのである。

知的社会に適応できない人が多くなるとポピュリズムに流れ、社会が混乱するという見方がある。今日のように利益や視聴率を第一とするテレビ、ラジオ、出版物はまさにそれを招来している。一定の刺激で目的を持たずに行動し、結果に責任を持たない流れである。

どうすればいいのか。

困ったときは原点に戻ることだ。昔は読み、書き、そろばんが基本であった。読み・書きは読解力、そろばんは数的思考力、これを組み合わせたものを問題解決能力と言い換えれば難しく受け止めることもない。

今は読解力もさることながら、人間関係を支える国語教育が課題であろう。学校の国語教育では基礎の基礎である語彙の量、言葉の意味、文法、敬語を重視することが現代的問題解決の近道だと考えている。語彙は表現能力を拡大し、言葉の意味は発表を正確にし、文法は誰にでも意思疎通を可能にし、敬語は日本独自の表現力で相手の心を和ませる。本の多読による追体験は対象への分析力と把握力を高める。

そして、大切なのはこれらを統合する力である。その力を活用する個人の人格が、他の力で揺れることなく自己を維持できることが根底になければならない。

これからの時代は、こうした力をもち、生徒の豊かな人間関係を築ける教師が求められる。情愛に満ち、指導者に必要な資質を真摯に学ぼうとする人こそ教師にふさわしい。

令和の御代を寿ぎ　新時代を切り拓く力を考える

浅野義英

「令和」の御代となり、皇位が無事に受け継がれたことを喜びたい。

一〇月二二日の即位式での陛下のお言葉に、次の一節があった。

「国民の幸せと世界の平和を常に願い、国民に寄り添いながら、象徴としてのつとめを果たすことを誓う」

「国民の叡智とたゆみない努力によって、我が国が一層の発展を遂げ、国際社会の友好と平和、人類の福祉と繁栄に寄与することを切に希望」

これは明治天皇の五箇条の御誓文にある、「今般、朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆　朕が罪なれば、今日の事、朕自身、骨を労し心志を苦しめ、艱難の先に立　古列祖の盡させ給ひし蹤を履み」とのお気持ちが背景にある。

遡れば、仁徳天皇は、「今、百姓貧きは、則ち朕が貧しきなり、百姓富まば、則ち朕は富むなり」といわれたが、国民を思う大御心は、歴代の天皇の共通の思いである。

今日、世界的に食糧・資源・災害などの大きな課題が山積しているが、中でも水問題に深い関心をもたれ、研究されているのが今上陛下である。

そうした問題に対して国民、とりわけ国政に携わる政治家、官僚は、〝億兆一人も其処を得ざる時は、自分の罪〟だという気持ちで仕事をしていくべきである。また私ども国民も、業に励み周囲の人々に対して〝一人一人が、其の処を得るように〟努めて行きたいものである。

幸い日本は古来より世界から文化を取り入れて、独特の高度な文明をつくってきた。古代からの神道に、外来の儒教、仏教、キリスト教、近代科学の思想を受け入れ，新しい価値を生んでいる。そして、それが海外で高く評価されている。

今後は国際化が一層進む。世界から期待されている日本は、その文化を発信しリードする時である。

令和の時代は陛下のお気持ちに添い、我が国の文明力を生かし、世界の進展に寄与していきたい。